役員室から

第2回
Work と Labor

“Work” and “Labor”

加藤和彦（産業技術総合研究所）

賃金をもらいながらの研究業務も半ばを過ぎた40歳台前半の頃から「研究者ってなに？」と考えるようになりました.「研究所」と名の付く職場で研究業務をしているのだから「研究者」？　いや，きっとこれは正しくは「研究職員」でしかないでしょう.

自分の職業に対してこんなモヤモヤした気持ちでいたときに，運よく20世紀の思想家であるハンナ・アーレントさん（1906年～1975年）の本に出会い，この疑問にたいする自分なりの解答を得ることができました.

アーレントさんは「人間らしい生活」には三つの構成要素があると説いています：“Action”，“Labor” そして “Work” です.

一つ目の “Action” は私の読んだ本では「活動」と訳されていました.「人間と人間の間での交流を作り出す行為であり, 物あるいは事柄の介在なしに, 直接人と人の間で行われる唯一の活動性」としていて「公的な領域での活動と言論によって初めて自己のアイデンティティが獲得される」のだそうです. 他者との交流を前提とせず「我思う．故に我あり（cogito ergo sum）」として自己のアイデンティティを獲得したデカルト（1596年～1650年）とは対照的です．私の場合は専ら「飲みニュケーション」ではありますが, 学会において自分の研究結果（仮説）を公表し他者の批判の目に晒す交流行為はまさに研究者が自己のアイデンティティを公的に獲得するための “Action” といえます.

そして，残り二つの “Labor” と “Work”，日本語ではどちらも「仕事」という語感で，私もそれまであまり区別していませんでした．しかし，アーレントさんはこれらをこう区別します：「“Labor” は人間の肉体の生物学的な過程に対応する活動性（生命自身が存続するための条件）」. つまり生きるための「労働」です.「労働は個人の生命を維持するためのものであり，個人の生命の維持とともにその成果は消滅する．そして，その個人が死去した後にはその痕跡も残さない.」と説いています．つまり，労働は生きるために人間を含む動物全般の行為ということになります．逆にいえば「労働しかしない人間は人間ではない」という辛辣な意味にもなります.

そこで出てくるのが “Work” です．アーレントさんによれば “Work” とは「持続的な『作品』（有形か無形かを問わない）を制作する活動性」であり「個人の生命を超えて存続する作品を作り出し，それが人々の間で成立する『世界』を構築する」のだそうです．つまり “Work” とは「作品」や「文化」を意味しているようです．私流の解釈では，この “Work” という活動性こそが動物と人間を決定的に区別するものであり，対価を求めることとは無縁に自分の死後の未来にも価値を残し継承されて世界の一部となるような何事かに取り組むことこそが「（動物ではなく）人間であるための条件」ととらえています．そして私は「アカデミアの世界においてこれを行う人こそが『研究者』なのだ」と考えるようになりました.

このような視点から昨今の研究現場をみてみると，多くの若い研究者が「Labor としての研究」に忙殺されているようにみえます．賃金待遇の尺度が数値化された現在において，自分が従属する職場からより多くの論文が求められる結果「新しいことを知りたい．知ったことをみんなに教えてあげたい」という研究本来の楽しさ（Work）を志向できず，とりあえず論文を書くための「消耗品研究」（すぐに上書きされるような賞味期限の短い研究．Labor 研究）に明け暮れ，結局それが自分の研究スタイルとして身に沁みついてしまう……

最後に，これを防ぐための心構え：現実的には Labor 研究から逃れられないかもしれないけど，Work としての研究命題（自分の存命中に答えがみつかるかどうかは問わない）をみつけその取り組みを継続すること．そして，この Work 研究は自分が帰属する職場で評価を得ることを前提とせず「自己の人生の『ものさし』」で厳しく評価すること．（注：個人の思想・感想です）

いつの日か，そんな Work 研究の成果で「太陽エネルギー」の紙上が賑わうことを夢想して……